

『金融システム改革と東南アジア』
長期趨勢と企業金融の実証分析

三重野文晴著 (京都大学東南アジア研究所准教授)

勁草書房
3888円

1



みえの・ふみはる 1969年生まれ。一橋大学社会学部卒業。同大学院修了。神戸大学教授などを経て現職。専門は経済発展論、金融システム論、東南アジア経済。著書に「ミャンマー経済の新しい光」(共編著)など。

東南アジアの工業化から
金融発展の可能性示す

評者 上川孝夫 (横浜国立大学大学院教授)

Book Review

『すべては1979年から始まった』
21世紀を方向づけた反逆者たち

クリスチャン・カレル著 (ジャーナリスト)
北川知子訳

草思社
2484円

2



Christian Caryl 1984年エール大学卒業。「ニューズウィーク」誌元東京支局長。

歴史の大転換期に現れた
4人の指導者の共通点

評者 中西 寛 (京都大学大学院教授)

エコノミスト

「世界の成長センター」と言われて久しいアジアだが、1997年のアジア通貨危機では、短期の外貨調達して国内で長期運用したことによる「ダブルミスマッチ」(満期と通貨のそれぞれのズレ)が危機の背景にあると言われた。危機時に短期資金が一旦に引き揚げられ、自国通貨の下落で対外債務負担が急増したからだ。しかし実際のところ、アジア工業化の資金源泉はどうなっている

のだろうか。こうした疑問に一つの回答を与えているのが本書である。本書はタイやマレーシアなどを対象として、東南アジアの金融システムの長期趨勢分析と、企業金融の実証研究を行っている。本書によれば、東南アジアの工業化は負債に過度に依存していたわけではなく、むしろ自己資本への依存が強い。外資系企業も親会社からの増資や親子ローンなどの形で資

歴史家がなし得る「発見」には2種類ある。一つは未発掘の史料を発見して知られていなかった事実を明らかにすること。もう一つは無数の事実の中にこれまで気づかれていなかった結びつきを見いだし、新しい歴史観を呈示すること。国際問題を専門とするジャーナリストが著した本書は後者に属する。書名の通り、本書は、21世紀の始まりは2001年でも冷戦が終焉し

た1990年ごろでもなく、1979年であると主張する。著者は一見脈絡なく起きたこの年の出来事が現在と過去とを分かち重要な意味を持ったことを、この頃に世界史の舞台に登場した4人、イギリスのサッチャー、中国の鄧小平、イランのホメイニ、ローマ教皇のヨハネ・パウロ2世の伝記を対比的に描いて浮き彫りにする。彼らの登場には直接の関連性はな

2015.4.14

金調達しており、地場の証券市場などとの関わりは少ない。要するに東南アジアの工業化と金融システムの間には「乖離」が存在しており、危機前に対外借入れで急拡大した商業銀行の貸し出しは主にサービ部門、例えばタイでは商業や不動産に向けられていたという。

行融資から証券市場へシフトさせようという改革自体にも限界がある。では代替策は何か。本書で重視されているのは、資金供給システムの整備よりも、資金需要サイドの要請に対応した改革である。例えば、膨大なインフラ整備、消費金融部門の成長、独自の技術革新の創出といった、東南アジアの工業化の新しい課題に対応した金融システムの構築・整備であり、その中で債券市場の育成も期待できるとする。

彼らの登場の頃まで政治の中心にあったのは、進歩への楽観に支えられた国家であった。イギリスの福祉国家も、毛沢東の革命的中国も、シヤールの権威主義的近代化路線も、ソ連東欧の社会主義国家もその系譜上にあった。しかし70年代には進歩の担い手としての国家への期待は急速

にしほんでいく。国家の行き詰まりに対して、サッチャーや鄧小平が唱導する市場主義や、ホメイニやヨハネ・パウロ2世が体現する宗教が政治運動としての力を獲得していくのである。歴史の流れとともに彼らの足跡は交錯していく。イランでイスラム革命が起き、ホメイニが指導者に就くと、革命の熱情は隣国アフガニスタンの訪問に励まされたポーランドの自由化運動の圧力を感じていたソ連はアフガニスタンへの介入を決定する。対ソ包囲網が構築される中、サッチャーは訪中して鄧小平と香港返還で合意する。彼らが導いた市場と宗教の台頭は、冷戦の終焉へとつながった。しかし今日から振り返れば、彼らが始めた革命は現代の課題へと直結しているのである。

2015.4.14

こうした乖離が生まれた背景には、銀行セクターが工業化より早い段階から貿易・商業と結びつく形で生成したことや、国民国家の形成が相対的に遅く、政府介入が弱かったなどの歴史的事情があり、この点で東南アジアを日本や韓国などとともに「東アジア型」と一括りで捉えるには無理があると見る。通貨危機後、アジア債券市場の育成などの金融システム改革が進められてきたが、そもそも東南アジアの製造業は外部金融の利用が活発でない。それゆえ、銀

本書の持つ含意は、資金需要サイドからすると、金融システムの発展は、経済成長あるいは工業化の特質によって多様なものになる可能性があるということである。東南アジアをフィールドとしているとはいえ、金融システム一般や経済統合論などにも寄与するところの大きい意欲的な研究成果である。

彼らの登場の頃まで政治の中心にあったのは、進歩への楽観に支えられた国家であった。イギリスの福祉国家も、毛沢東の革命的中国も、シヤールの権威主義的近代化路線も、ソ連東欧の社会主義国家もその系譜上にあった。しかし70年代には進歩の担い手としての国家への期待は急速

彼らが始めた革命は現代の課題へと直結しているのである。

エコノミスト

日本経済に
明日はあるのか

小峰隆夫著 ◆本体1600円+税
日本経済の行く手には多くの難問がある。短期・中期・長期という時間軸に沿って課題を整理する。

例題で学ぶ
初歩からの統計学

白砂堤津耶著 [第2版]
「使える統計学」を初歩から短期間にマスターできる。実戦的なテキスト。数学が苦手な人にも。カイ2乗分布の章を加えた改訂版。 ◆本体2500円+税

入門|経済学 [第4版]

伊藤元重著 ◆本体3000円+税
現実の経済問題を豊富に取り上げ、初心者か経済学を具体的に理解できるように工夫。第4版では、少子高齢化が財政に与える影響など、新たなテーマを追加。経済学入門書の決定版、待望の改訂!

これからの
日本の国際協力

ビッグ・ドナーからスマート・ドナーへ
黒崎 卓・大塚啓二郎編著
経済の長期低迷下ではODA増額よりも限られた予算の有効活用こそが重要課題。日本発の国際協力が世界をリードするための道標。 ◆本体2700円+税

第55回エコノミスト賞受賞!
アウトソーシングの
国際経済学

グローバル貿易の変貌と日本企業の
マイクロ・データ分析
富浦英一著 ◆本体3200円+税
国際分業はもはや海外直接投資が貿易かでは捉えることができない。海外の企業へアウトソーシングする動きはいかに広がってきたか。

経済セミナー
4・5月号

経済学入門:
理想のカリキュラム

経済学部生が、自分の関心のある問題に取り組むにはどのような知識を積み重ねていけばいいのか。1年生から4年生までの、理想のカリキュラムを提案し、学生の道しるべとする。
【対談】経済学部教育が目指すもの…岩本康志×吉原直毅
■トマ・ピケティ「21世紀の資本」刊行記念…山形浩生×飯田泰之 トークショー 訳者解説プラス

日本評論社
〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 http://www.nippon.co.jp/

エコノミスト